

「介護福祉」への興味から養成校受験に至るまでの意識形成過程

—介護福祉士養成校学生アンケートからの分析—

Process of Becoming Conscious from Interest in “Care-Welfare”
to Examination for a Training School

— Analysis of the Survey of the Students Being Registered
in the School Training for Care Worker —

立脇一美
Tatewaki Kazumi

要 約

介護福祉士を目指す学生は、年々減少している。今回、短期大学系の介護福祉士養成校の在学生を対象に、介護福祉に興味を抱き始めた契機から、養成校受験に至るまでの意識形成過程の分析を行った。その結果、「個人の生育歴や生活歴といった外的環境因子」と「個人の有する職業観」といった二つの要因が折り重なり、意識が形成されていくことがわかった。前者には、個人の生まれ育った家庭環境や、中学や高等学校で学び得た福祉に関する知識・体験、保護者の職業意識、進路を意識した時代背景などが含有され、意識形成の基礎要因となっていた。後者では、介護職に対し「やりがい」を追求し、他者の役に立ちたいという動機が検出できた。学生は、社会的雑念に翻弄されることなく、純粋に自分らしく生きる一つ的手段として、養成校を受験する意識を形成していくことが明確となった。

Key Words : 介護福祉士, 養成校, 学生数減少, やりがい, 希望, 自己実現

はじめに

近年、介護現場のマンパワーの不足が大きな社会問題となっている。高齢化率や平均寿命の上昇、後期高齢者や認知症高齢者の増加、新規の介護事業

所の開設など求人数の増加が顕著であることに対して、介護労働者の離職、介護労働希望者の激変といった求職者の減少が起こっている。介護福祉の現場は、通俗的な観点から、労働量に見合うだけの賃金が保障されていないこと、昇進や昇給のベースが低いこと、夜間労働や時差出勤といった変則的な勤務が多いこと、場合によっては時間外労働や休日出勤もあり、決して整った労働要件を提供しているわけではない。また、サービス対象者は価値観の多様な高齢者や障害者であり、介護労働者は、やり直しが利かない状況下で、介護技術以外に接客能力やコミュニケーション能力を要求されることが多く、日常的に多大な精神的ストレスを抱え込んでいる。特に身体介護は、自分の身体をサービス提供の手段として用いる労働であり、介護現場はいつの間にか「3k（きつい・汚い・危険）職場」の代名詞として使われるようになった。厚生労働省は、「福祉・介護人材確保対策について¹⁾」の中で、高齢者分野において、今後2014年までに約140万人から160万人の介護職員が必要であるという推計を出している。また日本介護福祉士会によると、2007年度の介護福祉士登録者数は約63万人であり²⁾、その内の約4割が、介護福祉士資格を取得しているが活用していない「潜在介護福祉士」であるということ公表している³⁾。

こういったマンパワーの不足を補うために、2006年9月には、日本・フィリピン経済連携協定が結ばれ、翌年8月には、日本・インドネシア経済連携協定が締結されて、外国人労働者の日本の介護現場への参入が認められるようになった。また2008年5月には、介護従事者等の賃金をはじめとする処遇の改善に資するための施策のあり方について、「介護従事者等の人材確保のための介護従事者等の処遇改善に関する法律」が公布され、介護職員の定着率の向上や、潜在介護福祉士の開拓といった人材確保対策に、ようやく閃光が放たれ始めた。

しかし介護福祉士を目指す学生数の減少は、深刻な社会問題を生み出している。日本の文化や慣習を十分享受し、2年以上の年月を掛けて高い専門教育を受けた介護福祉士は、混沌とした介護現場の中で、唯一介護の質の向上

を図ることのできる専門職として、多大なる社会的責任を担っている。単に若者が忌避する介護現場の穴埋めをするために、無資格者や外国人労働者を雇用するといった数合わせ的な発想ではなく、介護福祉士としての専門性は、業界の体質や資質を改善するために、今後どうしても必要な原動力となる。

日本私立学校振興・共済事業団が開示している「平成20年度私立大学・短期大学等入学者志願動向⁴⁾」によると、平成20年における短期大学の介護福祉分野の総入学定員は980名であることに對し、実際の入学者は486名であり、倍率としては昨年の0.80倍をさらに下回り、今年度は0.56倍であることを報告している。専門性の高い介護福祉士を養成しようとしても、既に入口部分で困難を極めている状況があり、仮に入学定員を満たしたとしても、今後学生がこのような状況下で、本当に介護福祉士資格を活かした職種に就こうとするのか、全く予測もできない不透明な状況が待ち受けている。

当聖泉大学短期大学部介護福祉学科は、1997年に滋賀県で第3番目の介護福祉士養成施設として認可を受けた。2008年3月までに、450名以上の卒業生を出し、滋賀県の介護福祉現場の人材確保における第一義的な役割を担ってきた。しかし2006年から状況が変化し、介護福祉を目指す学生が減り始め、2007年入学生は定員の64%、2008年入学生は定員の58%といった大幅な定員割れをおこすようになった。また学生募集活動の一環として教員が実施する高校訪問においても、高校側から「介護福祉を目指す学生はいません」と紋切り型の言葉が返るほど、介護福祉士という職種は、高校生の職業選択肢から除されるようになった。しかしこの現象とは裏腹に、当校の進路支援課における介護福祉職求人件数は年々増加し続け、職域エリアも拡大され、2007年度は合計300件以上の介護福祉職求人票を受け付ける形となった。

今後も継続して質の高い介護福祉士を養成していくためには、どのような対策が必要なのであろうか。介護福祉士を目指す学生の減少は、介護福祉・社会福祉業界にも大きな影響を与えているが、学校教育業界にも「学校運営存亡の機」と言われる程、かつてに体験したことのない事象が目前で起こり

始めている。介護福祉士養成校は、崩壊寸前状態であり、現状を打開すべく、各養成校が苦肉の策を講じている状況である。しかし大半の場合、それは「焼け石に水」であるかの如く、十分に結果を導き出せないものとなっている。

今回、以上の経緯から、どのようにしたら介護福祉士を目指す学生数を増やすことができるのか、学校教員側には見えない要因を抽出し、整理する作業が必要になると考えた。その手段として、介護福祉士を目指す学生の意識の推移に着目し、学生が何を感じ、何を考え、最終的に何が決定要因となり介護福祉士養成校の受験に至ったのか、その経緯から、介護福祉養成校の志願者確保対策や、今後の介護福祉士養成教育における教育指針を検討するプロセスに繋げていきたいと考えた。

1. 研究対象および調査方法

1.1 研究対象

聖泉大学短期大学部介護福祉学科在学中の全学生61名を対象とした。内訳は1回生29名（男子10名・女子19名）、2回生32名（男子17名・女子15名）であった。

1.2 研究方法および分析

2008年11月11日から同年11月13日までの調査期間において、対象学生にアンケート調査を実施した。フェイスシートを含んだ質問項目は7項目であり、自記式記入法とした。配票数・回収数ともに合計59枚であり、すべてが有効回答であった。今回の分析に関しては、介護福祉学科各回生より得られたデータと、総合的に得られたデータの3類型を示した。介護福祉学科の1回生と2回生とでは、年月の中で蓄積される付加要因に差異が生じること、また時間的経過の中で記憶の曖昧さが発生することを勘案し、敢えて分けて分類をした。また男子学生と女子学生とでは、ベースとしての性差や心理的側面に差異が生じる点に配慮し、それぞれを別カテゴリーとして整理をした。

1.3 倫理的保証

事前にアンケート調査を実施する目的・研究概要を説明し、倫理的配慮として、賛同を得られた対象者のみの自由意志に基づく回答であることを伝えた。また調査で得られた情報は、本研究以外の目的で使用することはなく、分析段階で一個人が特定されることがないことも説明に付け加えた。

2. 研究結果および導き出された知見

2.1 基本的属性

研究対象者の基本属性は、表1に示した。有効回答は、介護福祉学科1回生が27名(45.8%)、2回生は32名(54.2%)、合計59名(100.0%)である。その中で社会人の経験がある者は6名(10.2%)であり、他の学生は、高等学校卒業後、直接当校に入学をしてきた者である。また、高齢者との同居体験が今回の調査結果に及ぼす影響を勘案し、フェイスシートに高齢者との同居の有無を確認する質問項目を入れ込んだ。その結果、当校学生の場合、高齢者との同居率は40.7%であるということが分析できた。2008年、厚生労働省が開示した「平成20年版高齢社会白書」によると、65歳以上の高齢者との同居率は、全世帯を対象とした場合、43.9%であることが示されており⁵⁾、今回の調査対象者は全国平均レベルとほぼ同等であることが確認できた。

表1 調査対象者の平均年齢・高齢者との同居率

	1回生			2回生		2回生全体	全学生
	男子学生	女子学生	1回生全体	男子学生	女子学生		
有効回答数	9	18	27	17	15	32	59
平均年齢	18.6歳	18.8歳	18.7歳	26.5歳	20.7歳	23.8歳	19.3歳
高齢者との同居率	55.6%	44.4%	48.1%	35.3%	33.3%	34.4%	40.7%

2.2 介護福祉に興味を持った時期

介護福祉に興味を持った時期について分析をしたところ、その結果は、「高等学校二年・三年」に集約され、全体の50.8%という回答を得ることができた。

半数近くの学生は、自分の進路を真剣に考えなければならない高等学校生活後半という時間的制限の中で、急速に介護福祉に対する思いを膨らませていったのではないかと考える。次いで、ポイントの高い時期は、「小学校高学年」の13.6%であった。この年次は、主体的に自分らしく行動することが可能となり、それに他者容認が加わり自我形成が促進される時期である。今回の結果は、この時期に自分の「夢」を意識し、自己実現したいという思いが沸き起こり、それが持続した形で表出されたものであると考えることができる。また「小学校高学年」と回答した者の中で、「身内が死亡した時、自分は何もできなかった。その時初めて介護を意識した」と記入をしている学生がいた。これは、小学校高学年という進路決定には比較的早い時期であるが、過去の生活体験の中から「死」と向き合い、死に対する悲しみや厳かさから情緒的に派生した介護福祉への興味であると考えることができる。

総計的には、高等学校卒業までに介護福祉に興味を持ったと回答した者は、全体の91.5%に上った。介護福祉士養成校を受験する学生の大半は、無為に単なる「入学目的」だけで受験をするのではなく、以前から介護福祉に興味や関心を抱き、その専門性を高めたいと考え、進路を決定したということが読み取れる。他の調査結果に関しては、表2に示した。

表2 介護福祉に興味を持った時期

	1回生(割合%)		1回生全体 (割合%)	2回生(割合%)		2回生全体 (割合%)	全学生 (割合%)
	男子学生	女子学生		男子学生	女子学生		
小学校低学年	0.0	5.6	3.7	11.8	6.7	9.4	6.8
小学校高学年	11.1	16.7	14.9	11.8	13.3	12.5	13.6
中学1年	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	3.1	1.7
中学2年	0.0	0.0	0.0	0.0	26.7	12.5	6.8
中学3年	11.1	11.1	11.1	0.0	6.7	3.1	6.8
高等学校1年	0.0	0.0	0.0	17.6	0.0	9.4	5.1
高等学校2年	33.3	33.3	33.3	17.6	26.7	21.9	27.1
高等学校3年	33.3	33.3	33.3	17.6	13.3	15.6	23.7
高等学校卒業以降	11.1	0.0	3.7	17.6	6.7	12.5	8.5
まだ興味がない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	99.9(%)	100(%)	100(%)	99.9(%)	100.1(%)	100(%)	100.1(%)

(注) 割合とは、上段における各項目の中で左縦軸の各内容が占める比率をいう。

2.3 介護福祉に興味を持った契機

介護福祉に興味を持ったきっかけに関し、複数回答可という条件を示し分析したところ、「高齢者が身近にいた」が57.6%であり、「高齢者と触れ合う機会があった」が55.9%であった。次いで「高齢者福祉に関心があった」が54.2%と上位を占めている。また「高齢者が好きである」と回答した者は、全体の37.3%であった。「高齢者が好き」ということは、高齢者の価値を高く認め、共感的に理解し本質的に寄り添おうとする気持ちであると捉えることができる。今回のことから、生活の中で自然な形で高齢者と接触し、高齢者の現状を直視した上での興味の喚起であることが分かる。

高齢者と触れ合う機会に関しては、高齢者への「ボランティア体験」が、全体の56.1%と過半数を占めた。ボランティアとは、自分の意志で自発的に、社会に対し支援や貢献をすることであり、他者から強制されるものではない。またボランティアに参加することは、既存意識として高齢者福祉への関心が根底にあり、それを体験に結びつけようとする過程の表れであると解釈をすることができる。学生のこういった意識が、潜在的に介護福祉士養成校受験への橋渡しとなっているということも理解できる。

また「障害者福祉分野」と「高齢者福祉分野」を対比すると、「障害者福祉に関心がある」と回答した者は28.8%となっており、後者の約半数に留まっていることが分かる。これは、別項目で「自分もいずれ高齢になるから」と回答した者が28.8%であることに対し、「自分もいずれ障害を持つ可能性があるから」と回答した者は、8.5%であるという数値からも、障害者福祉への関心の程度を窺い知ることができる。

介護福祉に興味を持ったきっかけとして、マスメディアの影響を無視することはできない。介護福祉に関心を抱いた契機として、「テレビで高齢者・障害者のニュースやドラマ・ドキュメンタリーを見て」と回答した者は、学生全体の4分の1に当たる。その中で特に関心を持った内容は、ポイントの高い順に、「高齢化問題」「障害者自立支援法」「高齢者虐待」「高齢者の孤独死・自殺」「障害者虐待」「障害者の暮らしや死」となる。2003年に発覚した

株式会社コムスンの介護報酬不正受領に関する事件からわずか数年の間に、障害者自立支援法や、後期高齢者医療制度といった大きな福祉問題が相次いで世論を呼んだ。それは今まで福祉に関し素通りしていた人々が、真剣に福祉を見つめようとした表れでもある。連日マスメディアで福祉問題が報道され、その流れの中で学生も自然な形で介護福祉に関心を持つようになったと考える。

また「家族や知人が介護福祉に携わっていたから」と回答した者は、35.6%であった。これは個人の成育歴に、家族や知人の介護観が潜在的に入り込み、これが個人の進路に影響を与えたと考えることができる。しかし潜在的な介護観が、すべて個人の進路選択にプラス因子として結びつくとは限らず、マイナスイメージとして結びつく危惧もある。その場合は、別問題としての「介護離れ」という社会現象を引き起こす要因を生み出すこととなる。

他の特徴としては、「就職の一つの選択肢になると思ったから」と回答した者が、全学生の42.3%を占めたということである。このことから本来の「興味」という部分が、この段階では就職という不透明で漠然とした意識と重なりかけているということが分かる。他の調査結果は、表3に示した。

表3 介護福祉に興味を持ったきっかけ（複数回答）

	1回生 (%)		1回生全体 (%)	2回生 (%)		2回生全体 (%)	全学生 (%)
	男子	女子		男子	女子		
高齢者が身近にいた	33.3	66.7	55.6	64.7	53.3	59.4	57.6
高齢者が好きである	22.2	33.3	29.6	35.3	53.3	43.8	37.3
高齢者と触れ合う機会があった	33.3	50.0	44.4	58.8	73.3	65.6	55.9
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それは具体的にどのような機会でしたか							
ボランティア体験	50.0	40.0	42.8	90.0	57.1	63.0	56.1
中学時代の職場体験	25.0	30.0	28.6	30.0	42.9	33.3	31.7
高等学校の職場体験	25.0	30.0	28.6	10.0	0.00	3.70	12.2
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
高齢者福祉に関心があった	55.6	55.6	55.6	64.7	53.3	59.4	54.2
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それはどのようなきっかけでしたか							
高齢者関連の本を読んで	20.0	0.00	6.70	20.0	0.00	10.0	8.0
テレビで高齢者関連のニュースや、ドキュメンタリー、ドラマを見て	60.0	30.0	40.0	40.0	60.0	50.0	44.0
中学や高等学校の授業を聞いて	20.0	50.0	40.0	0.00	40.0	20.0	32.0
その他	0.00	20.0	13.3	40.0	0.00	20.0	16.0
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それはどのような内容ですか							
高齢化問題	55.6	41.7	45.5	47.8	41.2	45.0	45.2
高齢者虐待	11.1	25.0	21.2	13.0	17.6	15.0	17.8
高齢者の孤独死・自殺	11.1	20.8	18.2	17.4	17.6	17.5	17.8
介護保険制度	11.1	4.20	6.10	13.0	11.8	12.5	9.60
後期高齢者医療制度	11.1	8.30	9.00	8.70	0.00	5.00	6.80
その他	0.00	0.00	0.00	0.00	11.8	5.00	2.70
(累積)	100.0	100.0	100.0	99.9	100.0	100.0	99.9
障害者が身近にいた	11.1	27.8	22.2	17.6	20.0	18.8	20.3
障害者が好きである	0.00	11.1	7.40	5.90	6.70	6.30	8.50
障害者と触れ合う機会があった	22.2	27.8	25.9	17.6	35.3	28.1	27.1
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それはどのような機会でしたか							
ボランティア体験	66.7	20.0	37.5	100.0	100.0	100.0	70.6
中学校の職場体験	0.00	20.0	12.5	0.00	0.00	0.00	5.90
高等学校の職場体験	33.3	60.0	50.0	0.00	0.00	0.00	23.5
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
障害者福祉に関心があった	33.3	38.9	37.0	17.6	26.7	21.9	28.8
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それはどのようなきっかけでしたか							
障害者関連の本を読んで	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
テレビで障害者関連のニュースや、ドキュメンタリー、ドラマを見て	50.0	85.7	72.8	100.0	66.7	80.0	75.0
中学や高等学校の授業を受けて	50.0	14.3	27.2	0.00	33.3	20.0	25.0
その他	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それはどのような内容ですか							
障害者虐待	0.00	18.2	15.4	42.8	20.0	33.3	24.0
障害者の暮らしや死	0.00	27.3	23.1	28.6	20.0	25.0	24.0
障害者自立支援法	100.0	54.5	61.5	28.6	60.0	41.7	52.0
その他	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
自分自身がいかに悩みを抱えていたから	22.2	11.1	14.8	0.00	0.00	0.00	8.50
自分もいづれ高齢になるから	11.1	38.9	29.6	35.3	20.0	28.1	28.8
自分もいづれ障害をもつ可能性があるから	0.00	11.1	7.40	0.00	20.0	9.40	8.50
家族や知人が介護福祉に携わっていたから	22.2	22.2	22.2	47.1	46.7	46.9	35.6
今後高齢者ビジネスが流行ると思ったから	22.2	11.1	14.8	23.5	6.70	15.6	15.3
就職の一つの選択肢になると思ったから	44.4	61.1	55.6	23.5	35.3	31.3	42.3
その他	11.0	0.00	3.70	0.00	0.00	0.00	1.70
介護福祉に興味がない	0.00	11.1	7.40	0.00	0.00	0.00	3.40

(注) 数値 (%) は、上段における各項目の中で左縦軸の各内容(複数可)が占める比率を示す。
左縦軸の6項目(上記で「はい」と回答した者のみに対して)の内訳の数値は、本項目にチェックを入れた者から割り出した比率を示す。

2.4 介護福祉士養成校を受験しようとした契機

表4に介護福祉士養成校を受験しようとしたきっかけを示した。これは介護福祉への漠然とした興味から、養成校受験決定に推移をした心理的な因子を抽出しようとするものである。

まずその中で圧倒的にポイント数の高かった項目が、「介護福祉士資格が取得できるから」であり、全学生の72.9%を占めた。現行の介護福祉士国家資格は、養成校にて規定の単位を取得し、全国共通試験を受け一定以上の点数を修めることができれば、資格申請をすることにより授与されるシステムとなっている。養成校を受験することは、必然的に国家資格取得と結びつき、多くの学生が高い目的意識を有し受験をしたということが分かる。

次いでポイント数の高かった項目は、「将来家族の介護に役立つから」であり、全体の57.6%を占めた。また「人の役に立ちたいと思ったから」が40.1%、「社会貢献できる職種だと思ったから」が32.2%となっている。これについては、他者のために自分自身ができることを成し遂げたいという本質の部分と関わり、学生は非常に純粋な志しを持ち、共生することの大切さを潜在意識として持ち合わせていたということが分かる。また自分のことを大切に育ててくれた家族に対して、今度は自分が家族を守りたいという相互扶助の精神や感謝の気持ちを有し、それは他者に対する畏敬の念といった感情に結びついていると解釈をすることができる。

「介護職に就きたかったから」と回答した者は、全体の45.8%であった。これは、過半数近くの学生が、自分のゴールを見据え、目的達成のために受験をしたと考えることができる。また「就職に有利だと思ったから」と回答した者は25.4%となっており、就職氷河期と言われる現代において、就職に対する戦略を具体的に自分なりに練ろうとした意識や、就労そのものに対する意欲の高さを窺い知ることができる。これは、学生時代に学ぶべき事柄を、自分の進路と機能的に結び付けようとする目的指向型の学生がいるということの表れでもある。別の解釈としては、自分の進路が不透明な中で、ひとまず安全策として、求人数の多い「介護」という選択肢の一つを具現化しよう

とする心理であるのではないかと考えることができる。

反対にポイント数の低い因子としては、「昇給や昇進がしやすいと思ったから」が0%、「賃金の良い職種だと思ったから」が1.7%、「社会的地位の高い職種だと思ったから」は6.8%となっている。これらの因子は、実際の介護福祉の現場で大きな社会問題として取り上げられている事項であり、学生達は現実を十分に肯定した上での受験であるということが分かる。ある学生が、調査用紙の備考欄に「条件の悪い仕事は世の中にいくらでもある。社会的地位がどうか、昇給がどうか、そんなことは何も関係がない。ただ高齢者が好き。高齢者のお世話をしたいだけ。それだけ」と記入をしていた。

上記に随伴して、「やりがいのある職種だと思ったから」という事項に対して、49.1%の学生が肯定的な回答をしている。同じく調査用紙に「人と接することは、お金や物に替えられない大切なことに気づかされる。ただやりがいだけを求める」と書き切った学生がいた。労働条件に左右されず、純粋にやりがいだけを追求するためにこの職種を選択したのだという強い気持ち、別の視点から見れば、なぜそのような当たり前の質問を自分に向けるのかという私個人に対する抗議のようにも感じ取ることができた。

他の契機としては、「他者に薦められたから」が、16.9%であった。自分の気持ちが、ある程度決まっている時期に、他者が後押しをしてくれたという心理なのか、単純に迷っている時、他者に薦められたという状況なのか、自分の気持ちの中で何も結論が出ない時、ひとまず他者のアドバイス通りにしたという心理なのか、十分にその主旨を読み取ることはできない。しかし、他者の意見を確実に自分の気持ちの中に取り込んだということは理解できる。

また「知人が介護福祉士養成校を受験するから」と回答した者は3.4%であった。このことから、少人数ではあるが、自分の意志というより他者の存在に引きずられて受験をした者がいるということが分かる。友人との関係性の中で育まれる刺激も、意識形成要因の一つとなることが分析できる。

受験に対して曖昧さを残しながら、最終的に受験をしたという学生もいる。「なんとなく受験しようと思ったから」が8.5%、「他にしたいことが見つか

らなかったから」が6.8%、「他に受験する学校がなかったから」が5.1%となっている。このことから、進路選択の時期において、自分の進路を決定する因子を見つけることのできなかつた者が、ひとまず自分の今後の居場所の確保や、現状を何らかの手段で打開したいといった意識を有し、結果として当校を受験したということが分かる。

表4 介護福祉士養成校を受験しようとしたきっかけ（複数回答）

	1回生 (%)		1回生全体 (%)	2回生 (%)		2回生全体 (%)	全学生 (%)
	男子	女子		男子	女子		
介護福祉士資格が取得できるから	77.8	72.2	74.1	76.4	66.7	71.9	72.9
将来家族の介護に役立つから	33.3	61.1	51.9	47.1	80.0	62.5	57.6
介護職に就きたかったから	33.3	33.3	33.3	47.1	66.7	56.3	45.8
就職に有利だと思ったから	44.4	27.8	33.3	17.6	20.0	18.8	25.4
他者に薦められたから	22.2	38.9	33.3	5.90	33.3	18.8	16.9
(上記で「はい」と回答した者のみに対して) それは誰ですか							
家族	100.0	50.0	66.7	33.3	50.0	40.0	54.5
友人・知人	0.00	0.00	0.00	33.3	0.00	20.0	9.10
学校の先生	0.00	50.0	33.3	33.3	50.0	40.0	36.4
(累積)	100.0	100.0	100.0	99.9	100.0	100.0	100.0
知人が介護福祉士養成校を受験するから	0.00	0.00	0.00	11.8	0.00	6.30	3.40
人と接することが好きだから	0.00	11.1	7.40	17.6	33.3	25.0	16.9
人の役に立ちたいと思ったから	33.3	38.9	37.0	29.4	60.0	43.8	40.1
社会貢献できる職種だと思ったから	22.2	22.2	22.2	29.4	53.3	40.1	32.2
やりがいのある職種だと思ったから	55.6	44.4	48.1	35.3	66.7	50.0	49.1
魅力のある職種だと思ったから	55.6	27.8	37.0	5.90	46.7	25.0	30.5
将来性のある職種だと思ったから	22.2	33.3	29.6	29.4	35.3	34.4	32.2
安定性のある職種だと思ったから	44.4	0.00	14.9	23.5	0.00	12.5	13.6
賃金の良い職種だと思ったから	0.00	0.00	0.00	5.90	0.00	3.10	1.70
社会保障や福利厚生が充実しているから	11.1	11.1	11.1	17.6	0.00	9.40	10.2
昇給や昇進がしやすいと思ったから	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
結婚後も続けられる職種だと思ったから	0.00	11.1	7.40	0.00	33.3	15.6	11.9
社会的地位の高い職種だと思ったから	11.1	0.00	3.70	5.90	13.3	9.40	6.80
なんとなく受験しようと思ったから	11.1	11.1	11.1	11.8	0.00	6.30	8.50
他にしたいことが見つからなかったから	22.2	5.60	11.1	5.90	0.00	3.10	6.80
他に受験する学校がなかったから	11.1	0.00	3.70	5.90	6.70	6.30	5.10
その他	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

(注) 数値 (%) は、上段における各項目の中で左縦軸の各内容 (複数可) が占める比率を示す。左縦軸の1項目 (上記で「はい」と回答した者のみに対して) の内訳の数値は、本項目にチェックを入れた者から割り出した比率を示す。

2.5 介護福祉士養成校を受験しようとした時の不安要因

次に、介護福祉士養成校を受験しようと決意をした時、対立して個人の中で沸き起こる受験への不安要因について分析を行った。

まず介護福祉士養成校の受験に限らず、一般的に誰もが受験をする時に体感する不安因子があげられる。今回の調査でも「学校に馴染むことができるのだろうか」と回答した者は37.3%、「友人はできるのだろうか」と回答した者は44.1%と、4割近くの学生が、今後の学校生活に対して漠然とした不安を抱えているということが分かった。また進路に対する不安感もあり、3人に1人の学生が、「自分に卒業ができるのだろうか」「自分は就職できるのだろうか」といった将来的な未知数の部分に不安を感じていることが理解できた。

特に今回の調査で特徴的であったことは、介護福祉全般に関する不安感の強さである。「勉強（座学）に対する不安」が45.8%、「勉強（実技）に対する不安」が50.8%、「学外介護実習に対する不安」が50.8%であり、約半数の学生が介護福祉の専門的な分野の知識や技術の習得に不安を感じていることが分かる。また介護福祉士養成校における教育は、国家資格授与という重みに対して、座学の場合、授業日数の3分の2以上の出席が必要となり、演習なども健康の維持を当然のこととして行われる。それが今回の調査の中では、「規定の授業日数出席に対する不安」が20.3%、「健康面に対する不安」が13.6%という結果に繋がってきている。調査結果の詳細は、表5に示した。

2.6 介護福祉士養成校受験の最終決定

当校において今年度8月に実施した教員の高等学校訪問の中で、高等学校の進路指導担当者から「以前、学生に社会福祉や介護福祉分野の進路を勧めたところ、保護者より苦情が多数寄せられた。それを教訓として、今はこちらから学生に福祉分野の進路を積極的に薦めることはしていない」というシヨッキングな話を聞くことができた。今回、こういった社会的風潮の中で、現在介護福祉を学んでいる学生は、自分の意思や他者の意思をどれだけ反映して受験の決定をしてきたのか、分析したいと考えた。

表5 介護福祉士養成校を受験しようとした時の不安要因（複数回答）

	1回生 %		1回生全体 %	2回生 %		2回生全体 %	全学生 %
	男子	女子		男子	女子		
学校に馴染むことができるのだろうか	22.2	44.4	37.0	29.4	46.7	37.5	37.3
友人はできるのだろうか	44.4	61.1	55.6	41.2	26.7	34.4	44.1
勉強 座学 に対する不安	33.3	77.8	63.0	29.4	33.3	31.3	45.8
勉強 実技 に対する不安	66.7	66.7	66.7	41.2	33.3	37.5	50.8
学外介護実習に対する不安	55.6	66.7	63.0	35.3	46.7	40.1	50.8
健康・に対する不安	11.1	22.2	18.6	11.8	6.70	9.40	13.6
規定の授業日数出席に対する不安	22.2	38.9	33.3	11.8	6.70	9.40	20.3
自分に介護ができるのだろうか	55.6	50.0	51.9	41.2	46.7	43.8	47.5
自分に卒業ができるのだろうか	44.4	44.4	44.4	29.4	13.3	21.9	32.2
自分に格取得ができるのだろうか	33.3	55.6	48.1	11.8	33.3	21.9	33.9
自分は就職できるのだろうか	44.4	44.4	44.4	23.5	46.7	34.4	39.0
その他	0.00	5.56	3.70	0.00	0.00	0.00	1.70
不安はない	0.00	5.56	3.70	5.90	6.70	6.30	5.10

(注) 数値 (%) は、上段における各項目の中で左縦軸の各内容（複数可）が占める比率を示す。

表6 介護福祉士養成校受験の最終決定

	1回生 (%)		1回生全体 (%)	2回生 (%)		2回生全体 (%)	全学生 (%)
	男子	女子		男子	女子		
受験の決定は最終的に自分の意思である	88.9	88.9	88.9	100.0	93.3	96.9	93.2
受験の決定は最終的に他者の意思である	11.1	11.1	11.1	0.00	6.70	3.10	6.80
受験の決定に際し他者の反対はなかった	66.7	83.3	77.8	82.4	93.3	87.5	83.1
受験の決定に際し他者の反対があった	33.3	16.7	22.2	17.6	6.70	12.5	16.9
それは誰の反対ですか							
家族	75.0	100.0	85.7	33.3	100.0	50.0	72.7
知人	0.00	0.00	0.00	33.3	0.00	25.5	9.10
高等学校の先生	25.0	0.00	14.3	0.00	0.00	0.00	9.10
その他	0.00	0.00	0.00	33.3	0.00	25.5	9.10
(累積)	100.0	100.0	100.0	99.9	100.0	100.0	100.0

(注) 数値 (%) は、上段における各項目の中で左縦軸の各内容が占める比率を示す。
「それは誰の反対ですか」の内訳の数値は、本項目にチェックを入れた者から割り出した比率を示す。

詳細結果は、表6に示した。「受験の決定は最終的に自分の意思である」と回答した学生は、93.2%であった。それに反し「他者の意思である」と答えた者は、6.8%であった。そして「受験の決定に際し、他者の反対はなかった」という者は83.1%であり、「反対があった」という者は16.9%であった。このことから大半の学生は、自分の意思で受験をしたということが分かる。しかし少人数ではあるが、自分の意思とは裏腹に、他者責任の範疇で受験をしたと認識している学生が存在するということが分かった。「他者からの反対があった」と回答した学生は、全体の約6分の1であるが、結果としてこれらの学生は、反対を受けながらも全員が受験をして入学をしている。これは養成校受験に際し、学生自身が、反対する他者を納得させる理由や理論を十分に持ち合わせていたという解釈に結びつけることができる。反対者の内訳としては、72.7%は「家族」であり、他の因子として「高等学校の先生」や「知人」などが上がった。今回の調査で、他者が反対する理由に関しても分析をしたいと考えていたが、有効性の高い回答が少なく、データとして集計することはできなかった。しかし、一般社会の通俗的な概念としては、介護福祉業界の未完な部分を指摘する声が多く、今後の進路を意識した時、反対せざるを得ない状況が生み出されていると推測することができる。

2.7 当校に入学しようとした契機

ここでは、多くの介護福祉士養成校がある中で、学生がなぜ当校を選択し受験をしたのか、学校選択における因子を明確にしたいと考えた。滋賀県には介護福祉士養成校が3校あり、当校介護福祉学科は、男女共学の昼間制2年課程の短期大学としての位置付けにある。

今回複数回答可という条件で調査を行ったが、一番多かった要因は「二年間で介護福祉士資格が取得できるから」であり、59.3%を占めた。介護福祉士の場合、4年制大学で資格を取得する場合と、短期大学や専門学校といった2年過程で資格を取得する場合においては、資格上の差異はなく、同じ「介護福祉士資格」一本に集約される。「2年という短期間で資格が取れること

が魅力。一日も早く働きたい」と調査用紙の空欄に記入をしていた者もあり、これは自分の人生観や生活背景を勘案し、能率的にロスタイムなしで生きたいと願う学生の純粋な本音の部分ではないかと考える。

次いでポイントの高い項目は、「通学に便利だから」が47.5%、「自宅から近いところにあるから」が45.8%となっていた。このことから、時間の有効活用化や、学校生活を自分の生活圏域に融合させようとする学生の心理を窺い知ることができる。

また「入試形態が良かったから」と回答している者は39.0%であり、その内訳は、AO入試と指定校推薦入試に集約される。AO入試とは、入学試験の結果だけで受験生を評価することを避け、専門分野に対する本人の意欲を評価の対象とするものであり、受験に関する手続きも簡略化されている形態である。指定校推薦入試は、一定の基準枠に該当する学生が学校推薦を受け、面接試験の結果も踏まえ総合的に評価を受けるものであり、学生にとっては安全性の高い入試形態となっている。このようなことから、学生は煩雑性の強い事項を避け、自己防衛反応の中で、グレードの高い確証を求め、最終的に「合格」という結果を導く入試形態を選択していることが分かる。

他の要因としては、「教員の印象が良かったから」という回答が33.9%であり、「学内の雰囲気良かったから」は32.2%となっている。このことから、学生は受験校を具体的に絞り込む過程において、学校の本質的な部分を重視し、自分の価値観と適合するか判断しようとしていることが分かる。また教員に対しての印象も重視している点から、教員と自分との今後の関係性を予測し、学校生活の中で、教員が自分に対して与える影響を暗黙的に査定しようとしていることが分かる。総合的に、学生は学校の外的な部分を最初に確認し、その部分に問題がなければ、次の段階として内的な部分を見極めようとするということが分かった。

「身内や知人が当校の卒業生だから」が20.3%、「他者に薦められたから」が28.8%という結果も興味深い。この場合、学生は身内の出身校であるという揺るがしのない安全性に惹かれ、学校に全面的な信頼を抱き、受験に

表7 当校に入学しようとしたきっかけ（複数回答）

	1 年生 (%)			2 年生 (%)		全学生 (%)
	男子	女子	1 年生全体 (%)	男子	女子	
自宅から近いところにあるから	66.7	44.4	51.9	35.3	46.7	45.8
(上記で「はい」と回答した者のみに対して)						
通学時間はどれくらいですか						
15 分以内	66.7	12.5	35.7	60.0	57.1	46.2
15 分以上～30 分未満	33.3	37.5	35.7	20.0	14.3	26.9
30 分以上～45 分未満	0.00	25.0	14.3	0.00	28.6	15.4
45 分以上～60 分未満	0.00	12.5	7.15	20.0	0.00	7.70
60 分以上～75 分未満	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
75 分以上	0.00	12.5	7.15	0.00	0.00	3.80
(累積)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
通学に便利だから	55.6	27.8	37.0	58.9	53.3	47.5
学費が適切だから	0.00	11.1	7.41	5.90	26.7	11.9
自分の偏差値から適切だと考えて	11.1	5.56	7.41	29.4	20.0	16.9
二年間で介護福祉士資格が取得できるから	55.5	50.0	51.9	58.9	73.3	59.3
準学士の学位が取れるから	11.1	5.56	7.41	5.90	0.00	5.10
入試形態が良かったから	33.3	55.6	48.1	35.3	26.7	39.0
(上記で「はい」と回答した者のみに対して)						
あなたの入試形態は何ですか						
AO 入試	100.0	80.0	84.6	66.7	66.7	77.3
指定校推薦	0.00	20.0	18.2	33.3	33.3	22.7
公募推薦	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
社会人入試	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
(累積)	100.0	100.0	102.8	100.0	100.0	100.0
受験科目が良かったから	0.00	0.00	0.00	17.6	0.00	5.10
就職指導体制が整い、就職内定率が高いから	11.1	16.7	14.8	5.90	6.70	10.2
他者に薦められたから	0.00	61.1	40.7	17.6	20.0	28.8
(上記で「はい」と回答した者のみに対して)						
誰に薦められましたか						
家族	0.00	18.2	18.2	33.3	33.3	23.5
知人	0.00	9.10	9.10	33.3	0.00	11.8
高等学校の先生	0.00	72.7	72.7	0.00	66.7	58.8
先輩	0.00	0.00	0.00	33.3	0.00	5.90
(累積)	0.00	100.0	100.0	99.9	100.0	100.0
身内や知人が当校の卒業生だから	44.4	11.1	22.2	11.8	26.7	20.3
友人が当校を受験するから	0.00	0.00	0.00	5.90	0.00	1.70
当校における介護福祉の専門性が高いから	22.2	22.2	22.2	11.8	6.70	15.3
学内の雰囲気良かったから	22.2	33.3	29.6	29.4	35.3	32.2
教員の印象良かったから	11.1	50.0	37.0	29.4	33.3	33.9
事務職員の対応良かったから	0.00	11.1	7.41	5.90	6.70	6.80
在校生の印象良かったから	11.1	27.8	22.2	5.90	20.0	16.9
オープンキャンパス良かったから	22.2	38.9	33.3	41.2	26.7	33.9
出張授業や進路ガイダンス良かったから	11.1	11.1	11.1	5.90	6.70	8.50
大学案内のパンフレット良かったから	11.1	11.1	11.1	5.90	6.70	8.50
その他	11.1	5.60	7.40	5.90	0.00	5.10

(注) 数値 (%) は、上段における各項目の中で左縦軸の各内容 (複数可) が占める比率を示す。左縦軸の 3 項目 (上記で「はい」と回答した者のみに対して) の内訳の数値は、本項目にチェックを入れた者から割り出した比率を示す。

結び付けたということが分かる。また過去に何らかの形で学校と関わった者の主観的な評価が、受験決定に影響を与えるということも理解できた。

学校紹介の媒体として一番ポイントの高かった項目は、「オープンキャンパスが良かったから」であった。オープンキャンパスに参加をすることは、学校への「興味」が前提にあり、直接参加をすることにより、不透明であった部分を透明化し、自分の満足を満たす学校として認知をして、受験に結び付けたと解釈することができる。他の結果については表7に示した。

3. 考察

介護福祉士養成校を受験しようとする学生は、自分を取り巻く複雑な外的因子と、自分の中で形成された「介護福祉」に対する価値観との融合点を見つけ、最終的に自分で確認作業を行い、自ら養成校の門戸をたたくということが明確となった。また大半の学生が介護福祉分野に自分のやりがいや未来を投入し、自分らしく生きるための一つ的手段として受験をするということも分かった。しかし高等学校時代に自分と十分に向き合うことができず、心のどこかに漠然とした曖昧さを抱えている者もあり、曖昧さを模索するために受験をするという事実も確認することができた。

今回の調査研究全般を通し、学生は介護現場の社会的なイメージを自分の中に自然な形で取り込み、肯定をした上で、「それでも自分は介護がしたいのだ」という強い意志をメッセージとして送り続けている感触を覚えた。また調査に対する回答内容を集約すると、学生の方から「高齢者が好きとか、他者の役に立ちたいという理由だけで、介護をしてもいいのかな」という別視線から派生する暗黙的な社会に対する問いかけのようなものを感じることができた。介護福祉を支えるために大切なことは、外見的な枠組みを整えることだけではなく、他者に寄り添いたいと思う心だと、返って学生から教えられた感を強くした。今後社会がこういった事実をどれだけ真摯に受け止め、大切に扱い尊重をするかといった視点や方策が、問われるようになると考える。今後の介護福祉業界の方向性や、介護福祉士養成校における教育・

学生数確保といった問題に関しては、後追いつ的な事項に翻弄されるのではなく、潮流を逆行させ、何よりも先行して揺るぎのない土台を構築する必要があるのではないかと考える。

2008年10月、社団法人日本介護福祉士養成協会が、「かいごのごかい⁶⁾」という小冊子を発行した。冒頭部分に「人の役に立ちたい みんなの笑顔が好き 当たり前のことだと思ってた ‘ありがとう’ ちょっと辛いこともあるけれど 愛情がある仕事です」という大きなメッセージが掲げられている。冊子の内容は、介護労働における世間の誤解や偏見を解き、介護福祉の良さを前面にアピールするものとなっており、これは今回の調査の中で得られた結果と同じ価値観から派生するものではないかと考える。

今後、介護福祉教育に携わる者や介護を現業とする者は、以下の三点を意識し介護福祉士の養成にあたらなければならないと考える。第一の視点は、介護福祉の本来目指すべきゴール・理想とする像、あるべき姿を具体的に明確化していく作業を着実に実践することの重要性である。第二の視点は、介護福祉とは他者の人生や生活に寄り添うことのできるフィールドにあり、介護福祉士は、人間としての本質を尊重する高貴な専門職であるという認識の高揚である。そして第三の視点は、介護に携わる者すべてが自らの職種に対して誇りを高く持ち、それを社会全体に連続的に開示していく作業の実践である。今後これらの点を自明的な状態として、日常の中に落とし込み、教育や介護実践の場で普及させることが必要なのではないかと考える。

【参考・引用文献】

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/09.html> 2008/11/11
- 2) 社団法人日本介護福祉士会「介護福祉士の教育のあり方に関する検討会報告書」2007年 p1
- 3) 「シルバー新報」2008年4月25日号 環境新聞社 2008年
- 4) <http://blog.university-staff.net/archives/2008/08/post-1520.html>
2008/11/11

196 「介護福祉」への興味から養成校受験に至るまでの意識形成過程

5) <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2008/zenbun/html/s1-2-1-02.html> 2008/11/22

6) 社団法人日本介護福祉士養成施設会「かいごのかいご」文化メディアワークス 2008年

【参考資料】

1) 井口克郎「介護現場の人手不足と若者の介護への就職意識」『人間社会環境研究』第15号 2008年

2) 南正信他「福祉系短期大学生の進路選択過程における自己効力感と大学選択動機との関連」筑波国際大学紀要 2008年

3) 立島真他「介護福祉士養成校の志願者動向とこれからの課題について」富山短期大学紀要第43号 2008年